

「みんなで作るイメージの世界～生き物の形～」展の成果と課題

—展示空間とイメージの問題を通して—

蝦名敦子

本小論は、2018年8月14日～17日まで行われた、筆者の企画によるワークショップ型展覧会「みんなで作るイメージの世界～生き物の形～」展を振り返り、当初の展覧会企画の意図がどのように達成されたか、その成果と今後の課題を明らかにする。その際、「空間」の活用という観点から、本展覧会の特徴についてこれまで実施した展覧会と比較しながら考察する。具体的には展覧会での「空間」のあり方に注目し、「場所の空間」、「造形空間」、「展示空間」と分けてその変容について検討した。

展覧会とワークショップが一緒になった本ワークショップ型展覧会では、子供たちがつくってみたいと思ったら、その場で手を動かして製作することができる。特に本展覧会と一緒に展示の場もつくっていくものであった。それが今回の実践で達成され、可能性のあることが判明した。

しかしそこには、常にその場に作品を展示して見せる、見せ方の造形的なバランスの問題が生じる。違う質のものを取り入れながら、調和を生み出す展示を考えなければならぬからである。筆者の企画ではこれまでの展覧会も含めて、タイトルに「みんなで～」と銘打っていたが、多様なものを取り入れて調和を生み出す空間についても考えることを、同時に期間中に行っていたことになる。それは展覧会として重要な「展示空間」が、作品が増えることで刷新され、新たなより良い「展示空間」を指向していくことでもある。つまり作った作品を並べて見せるだけの陳列の場所ではなく、作った作品が「場所の空間」に働きかけて生まれる新たな「展示空間」、すなわち展示物を使って新たな空間を創り出す「造形空間」としての意味を併せ持つのである。

展覧会名を「みんなで作るイメージの世界～生き物の形～」展としたように、学校のクラスの仲間だけではなく、一般の社会の中でも年代の異なる子供たちや保護者、大学生が一緒になって、造形を通して皆でイメージの世界を共有できるということ、またさらにその世界を造形的に調和を図りながら創り出すことができるということ、本展覧会を通して実感できた。それが今回の展覧会の一番の成果であろう。

課題としては、ワークショップの実施時間の調整と、展示空間と制作スペースの配置の問題、がある。前者については、ワークショップを常時するのか、時間を決めるのか、その取り入れ方（時間）の問題であり、後者についてはワークショップを行う制作スペースの確保（場所）の問題である。つまり作業の場所も展示空間の中にも含めるのか否か、今後さらに検討しなければならない。